

芦屋大学論叢 第七十七号
(令和四年八月八日) 拠刷

《研究ノート》

古代中国に於ける教育方法論

「禮記」〔がつき「學記」〕を読む」

白

江

恒

夫

古代中国に於ける教育方法論

—『礼記』「学記」を読む—

白 江 恒 夫

芦屋大学臨床教育学部特任教授

はじめに　—目的と動機—

本稿の主目的は、東洋の教育方法論の嚆矢ともされる『礼記』「卷第十八学記」の内容紹介にある。とは言え、対象が外国（中国）語文だから、自らの責任ある本文理解を示すためには漢文訓読という翻訳手続きが必要となる。英文タイトルが *Introduction* なのに、邦文タイトルを「読む」としたのはそのことによる。「学記」の内容紹介に先立ち、当時の歴史背景と思想状況の概略を見ておきたい。

秦の天下統一（紀元前二二一）からその滅亡（前二〇六）という激変期を経て漢帝国が樹立（前一〇二）されるが、前漢第七代の武帝（前一五六～前八七）は董仲舒を用いて儒教を国教と定めた。その結果、国家的正統思想の地位を獲得した儒家は、新たに皇帝を中心とする中央集権国家体制への理論的対応を模索すると共に、古典の整理と文献制作の作業を迫られたであろうが、その中に、統一的な礼の教範の設定があつたと考えられる。^{〔注1〕}ここにとり上げる『礼記』は、前漢の儒者戴聖が世に伝えた礼に関する理論と実際を記した書で、周末から漢初までの儒家の説を収録したものと言われている。^{〔注2〕}このように『礼記』四九編の各編は著者が誰であるのか不明だが、特に「大學」と「中庸」の二編は、漢代儒学の優れた哲学・政治・学問論である。ここで扱う卷第十八「学記」

は、卷第四十二「大學」と共に東洋の教育の原典と言われることもある。戴聖による『礼記』編纂に至るまでの両者の原資料が別々に存在し記録されたことも考えられるが、教育の目的、精神を明らかにした「大學」と教育の制度・教授法を明らかにした「学記」との間には密接な関係があると推測される。しかし、「大學」に比し、「学記」は一般にはあまり知られていないようである。^{〔注3〕}もとより国文学（日本文学）徒である筆者が、このような外国語文献を扱うのはおこがましい気もするが、これを漢文として訓読することはできなくはない。筆者自らの指導者体験^{〔注4〕}と卷末に掲げた参考文献を頼りに、これを丁寧に読み、先人が考えていたことを祖述しておこうと考へた。

教育学といえば西欧の学問が主流をなす現代ではあるが、東洋に於ける古代の教育方法の書を繙くことは決して無駄にはならない。子育てや学校教育の方法を模索し試行錯誤する現代の子を持つ親や教師等にも、ヒントになり道案内となることもあるだろう。二千年以上も前にできた書物であるから、現代にそぐわない用語や表現があるかもしれないが、本質的な問題は古代も現代と少しも変わらず、十分に通用する。

底本には後漢の儒学者鄭玄（一二七一二〇〇）の注を載せる『漢文大系禮記』を用いたが、煩雑に過ぎるのでここでは本文を省略し、訓点に従った訓読文と通釈を自ら作成して示した。但し、必要な場合には訓

読文のへゝ内に鄭注を示した。底本の旧字体は、敢えて新字体には改めなかつた。一の C 「學學半（教フルハ学ブノ半バ）」のように、新字体では解釈説明できない場合もあるからである。尚、訓読文中の片仮名のルビは底本によるが、必要に応じて私にルビをつけることもあつた。その際には平仮名のルビとした。

本稿では、「学記」本文を便宜的に、内容から小項目 A～S に分けて訓読し、それを更に次の如く一～十一の中項目を設け分類配置した。

- 一、綱領（学問教育の必要性・目的） A B C
- 二、教育機関 D
- 三、教の大倫七ヶ条 E
- 四、正業と居学 F
- 五、今の教育の批判 G
- 六、四法とその逆の方法 H I
- 七、師のあるべき姿（とするべき方法） J
- 八、学生の四つの偏り K L
- 九、学問教育と政治との関連及び師の尊厳性 M N
- 十、実際教育上の技術 O P Q
- 十一、まとめ R S

文中の A は訓読文、A.1 は【通釈】、A.2 は【語釈・解説】。B 以下もこれに倣う。

以テ民ヲ化スルニ足ラズ。君子如シ民ヲ化シ俗ヲ成サント欲セバ、其レ必ズ學ニ由ランカナ。〈所謂學者、聖人之道、在三方策者也。〉

A.1 【通釈】自分なりの考え方で行動して、一応それが法式に合い、次に多くの才能ある人物を借りて政治を行なつても、確かに有名になるかもしない。しかし、民衆を動かして自在に働く（民衆に感動を与えて動かす）ことは出来ない。為政者自ら賢者について学び、身近なことだけではなく、遠方の事情も把握し、縁遠い疎遠な人にも親しんで（＝體）いつても、まだ本当に民衆を立派に感化する）ところまではいかない。だから、君子（君主、為政者）が、もし本当に民を感化して良い風俗を作り上げようとするならば、どうしても学問と教育の力によらなければならぬ。

A.2 【語釈・解説】○「諛」の音はショウ（セウ）で、少・小の意。

○『禮記』卷第四十二「大學」に「大學之道、在レ明ニスルニ親ムニ民、在レ止リ於リ至善ニ。」とある。大學之道は「修己治人」であるから、今日いう真理の探究にとどまるのではなく、それを人に及ぼすという考え方がある。「學記」で説く「學」もこれに同じ。
・鄭注（所謂學者…）は、「學」は聖人の道であり、それは先哲の残した書物（方策）に書き記されている、という。

B 玉琢カザレバ器ヲ成サズ。人學バザレバ道ヲ知ラズ。是故ニ、古ノ王者、國ヲ建テ民ニ君タルニハ、教學ヲ先ト爲セリ。兌命ニ曰ク、終始ヲ念ヒテ學ニ典ニスト。其レ此レノ謂ヒ力。

A 慮ヲ發シテ憲アリ。善良ヲ求ムルハ以テ諛スコシク聞ユルニ足ル。以テ衆ヲ動スニ足ラズ。賢ニ就キ遠ヲ體スルハ以テ衆ヲ動スニ足ル。未ダ

B.1 【通釈】玉は磨かなければ、宝玉として通用しない。人は学ばなければ

ば、道を知ることは出来ない。だから、古之王者は、国を建て政治を行なうには、教育と学問を先務とした。兌命（尚書「説命」編）に「人は一生を通して常に学問に努めなければならない」とあるが、それはこのことを言つたものであろうか。

B.2【語釈・解説】○どんなにすばらしい才能があつたとしても、努力を重ねて磨かなければ立派な人物にはなれないし、学ばなければ人間のるべき道を知ることができないのである。

C嘉肴有リト雖モ食ハザレバ其ノ旨キヲ知ラザルナリ。至道有リト雖モ學バザレバ其ノ善キヲ知ラザルナリ。是故ニ學ビテ然シテ後ニ足ラザルヲ知リ、教ヘテ然シテ後ニ困ムヲ知ル。足ラザルヲ知リテ、然シテ後ニ能ク自反ス。困ムヲ知リテ、然シテ後ニ能ク自強ム。故ニ曰ク教學ハ相長ズト。兌命ニ曰ク、學ハ學ブノ半ト。其レ此レノ謂ヒ力。
〈言學レ人。乃益ニ之學半。〉

C.1【通釈】嘉肴（うまいさかな）があるといつても食べなければ、そのうまさがわからない。至道（すばらしい道。誠の道）があるといつても学ばなければ、そのすばらしさがわからない。だから、学んで後に足らざるを知り（様々なことを学んで初めて、自分の知識や経験がいかに足りないかを知り）、教えて後に困むを知る（人に教える時になつて初めて、教える者としての自分の未熟さと努力の必要性を思い知らされる）。足らざるを知つて初めて自ら反省する。困むを知つて初めて自ら努力して勉強する。そこで初めて至道の善さがわかるのだ。だから、教えることと学ぶことは両者相互に長じて（伸びて）行くのである。書經（尚書）説命編に「学学半」と言つてゐるがそれはこのことを指して言つてゐるのだろうか。

C.2【語釈・解説】○學ハ學ブノ半。「教」の旧字体は「教」だが、元は「斂」である。「斂」は左（偏）に「學」、右（旁）に筈の意の「支」を加えた会意文字。つまり、「教」には既に「學」が含まれているのであり、三Eでは教室に「支」即ち「夏楚二物」をおいて威儀を齊えた、という。

二、教育機関

D古ノ教フル者ハ、家ニ塾有リ、黨ニ庠有リ、術ニ序有リ、國ニ學有リ。比年ニ學ニ入り、中年ニ考校シ、一年經ヲ離シテ志ヲ辨ズルヲ視ル。三年業ヲ敬シ羣ヲ樂ムヲ視ル。五年、博ク習ヒテ師ニ親ムヲ視ル。七年、學ヲ論ジ友ヲ取ルヲ視ル。之ヲ小成ト謂フ。九年、類ヲ知リテ通達シ、強立シテ反カズ。之ヲ大成ト謂フ。〈離レ經章斷句絶也。辨レ志謂レ別其心意所ニ趣鄉一也。〉夫レ然シテ後ニ以テ民ヲ化シ俗ヲ易フルニ足リ。近ヰ者ハ説ビ服シ、遠ヰ者ハ之ニ懷ク。此レ大學ノ道ナリ。記ニ曰ク、蛾子時ニ之ヲ術フト。其レ此レノ謂ヒ力。

D.1【通釈】古の教育機関には、家に居るような幼い者を対象とした塾があり、党に庠があり、術（遂）に序があり、国都に学があつた。比年（毎年）に入学して、中年（一年おき。二年目毎）に試験をする。入学の一～二年の間は、経書の読誦と解釈を学ばせてそれを観る。三年経てば、怠りなく学業に努め、友人関係を大切にして楽しんでいるかを観る。五年経てば、専門の深い勉強だけでなく、幅広い勉強が出来ていて、教師によく親しんでいるかを観る。七年経てば、学問の内容を深く論じていき、自分の生涯の友を求め、得てゐるかどうかを観る。これを

小成（基本的な完成）という。九年経てば、凡そ類似のものに一貫する真理をわきまえて、学問の道にしつかり通達することが出来る。道理に反かず立場を固めさせて、その結果を見る。これを大成（大完成。すつかり完成されたもの）という。それほどになつたら、化^レ民易^レ俗（民を善導して風俗を易えること）が出来る。その結果、遠近を問わず人々は懷いてくる。（学問が完成した頃に、自然と政治的な力もついて人々が懷いてくるようになる。）これが大学の道（眞の学問の目的）なのである。記（散佚した昔の書物か？）にいう、「蟻の子は土をくわえることを習つて怠らず、そしてついに大きな蟻塚を造る」と。これはまさしくこの大学教育の趣旨に合致している。

D.2 【語釈・解説】 ○家ニ塾有り。周代の制度で家二十五戸が里。里の入り口の門（閭）の側に家を建て塾と称し、そこで村里の子弟を教育した。○党ニ庠有り。周代の行政区画で五〇〇家が党。党の学舎を庠と称した。

○術ニ序有り。術は一二五〇〇家の称。術にある学舎が序。○国ニ学有り。国は国都。国にある学舎が学。○一年經ヲ離シテ志ヲ辨ズル。底本鼈頭に「離經辨志ハ經ノ章句ヲ斷截シ其義ヲ敷衍シテ目前ノ事ニ應用スルナリ」という。

三、教の大倫（大きな筋道）七ヶ条

其ノ心ヲ存セシムルナリ。幼者ハ聽キテ問ハザルハ、學コト等ヲ躡エザルナリ。此ノ七者ハ教ノ大倫ナリ。記ニ曰ク、凡ソ學ハ官ハ事ヲ先ニシ、士ハ志ヲ先ニストハ、其レ此レノ謂ヒカ。

E.1 【通釈】 大学で最初の授業に当り、まず皮弁の服装（朝廷に於ける百官の朝服）で先聖先師の祭を行ない、芹藻を供えるが、それは、学生に学問、学芸の道の尊重すべきを教えるためである。そしてこの祭りの時に、詩の小雅三篇を歌つて習わせるのは、大学入学の最初は人の仕官の最初であることを教えるためである。又、すべてきちんととした時間の設定をして始業合図の太鼓を鳴らして教室に集め、篋（箱・かご）の中の書物を開かせるのは、学業に恭順ならしめるためである。夏・楚二物を教室に備えるのは威儀（作法に適った立ち居振る舞い）を齊えさせるためである。

天子が夏の禘祭（大祭・廟祭）の日取りを卜定（吉凶を占い定めるこ）としないちは大学を視察しないが、それは、学生に余裕を与える落着いて勉強させるためである。教師が学生を見るべき時（timely）によく氣をつけて見ておき、いちいち細かい点を注意しないのは、教えを受けれる者（学ぶ者）の心をのびやかにさせるためである。幼者が教師の言うことをよく聴いていて、やたらに質問をして来ないのは、教える側が程度を越えていないからである。

以上の七つは、教（大学教育）の大きな筋道である。記（古書の類）に言う「凡そ学問は、官（指導者）は教える内容を重んじ、士（学問をする者。いまだ学問をしている者）は何を学問するかに意を注ぐ」とは、上述の趣旨を言うものであろうか。

E.2 【語釈・解説】 ○芹藻。水中に生じる草。せりとも。神を祭るに用いる。○宵雅三ヲ肄ハシム。鄭注は、『詩經』「小雅 鹿鳴什」の鹿鳴・四

牡・皇皇者華の三篇を指すと言う。○夏楚二物。昔、学校で怠け者をこらすのに用いた笞。夏は榎（ひさぎ・こひさぎ）、楚は荆。○幼者ハ聽キテ問ハザルハ、^{ヲシブル}學コト等ヲ蹠エザルナリ。「問」の主語を教師とすれば、「幼者にはよく聽かせておいて、教師がやたらに質問をしないのは、教える程度を越えないことである」となる。学問するには順序・次第があるので、それを外さないことが肝心である。教師がそのことを弁えておれば、学ぶ者に受身ではなく能動的に学問させることができるのである。○「凡^ソ學官^ハ先^{ニシヲ}事」を「凡^ソ學官^ハ先^{ニシヲ}事」とも訓める。いずれにしても、士を経て後に學官（指導者）に到る意を含むのであろう。

四、正業と居学

F.1 【通釈】大学の教育は春秋と冬夏の授業がある。そこでは必ず正規の課業（必修科目とする考え方もあり）があり、授業が終わり退き休息する時には、居学（自宅学習・復習・宿題）がある。自ら楽器の演習をやつ力。

F.2 【語釈・解説】進マシメテ其ノ安ヲ顧ミズ。人ヲシテ其ノ誠ヲ由ヰザラシム。人ヲ教ヘテ其ノ材ヲ盡サズ。其レ之ヲ施スヤ悖リ、其レ之ヲ求ムルヤ佛レリ。夫レ然リ。故ニ其ノ學ヲ^{イダ}隠ミテ其ノ師ヲ疾ミ、其ノ難ニ苦シ^{ニカ}ンデ其ノ

G 今ノ教フル者ハ、其ノ佔畢ヲ呻シ、其ノ訊ヲ多クシ、言數ニ及ブ。
F.2 【語釈・解説】○「藏修」の学問は知識等を詰め込む類で、「息遊」の学問は参拝・見学・旅行の類。

五、今の教育の批判

てみなければ習熟することが出来ない。教師に習っているだけではだめなのである。博依（古注、広く比喩すること。依は或は衣。）を学ばなければ、詩經の内容に充分習熟することは出来ない。普段自分が家に居るような時に、実際に雜服（古注、冕服皮弁の類）を稽古しなければ、礼に習熟することは出来ない（教えられているだけではいけない）。このように、自主的に興味を持つて勉強に励み知識・技術の会得に努めなければ学を楽しむことは出来ない。だから君子の学問は藏し（学んだ大切なことを、重々しく心の奥深くにしまつておく）、修し（学問は無限であるからいつも磨きをかける）、息し（いつも緊張しているのではいけないから休憩をする）、游す（いつも緊張して詰め込むだけではいけないので楽しむ）のである。こういうわけであるから、君子は学問の奥義に達し、教師に親しみ、友達と仲良く交友関係を楽しみ、道を信じることが出来るのである。だから師友と離れることがあっても、学問が身についているから教えに反しない。説命に「道を敬い学業に努めて励む時は、学問の立派さ・完成が到来する」というが、それは以上のことを言つたものであろう。

益ヲ知ラザルナリ。其ノ業ヲ終ルト雖モ、其レ之ヲ去ルコト必ズ速力ナリ。之ヲ教ヘテ刑^ナラザルハ、其レ此レニ由ルカ。〔刑猶レ成也〕

G.1【通釈】 今の教育では、教師はただ目前の佔畢（木や竹の札。教科書類）を声をあげてとなえ（呻）、その訊（問い合わせ・難問）を多くし、言が多岐に渡り、学習範囲を広めて急いで進み、其ノ安（学生が習熟すること）を顧みず、誠（自発的な学習）をなさしめない。又、人を教えるのに材（もちまえ・個性・才能）を尽すことに努めない。これは、教える方のやり方が間違つており、又、学ぼうとする学生の方も間違つているのである。だから学生は学問を好まず、教師に親しまず、厭い、学習の困難に苦しむだけで学問の利益を知らずに終わつてしまふ。だから、学業が終つても簡単に忘れ捨ててしまうのである。今の教育が功を成さないのはこの様な理由によるのではなかろうか。

G.2【語釈・解説】 ○佔畢。簡編の字面だけを見て、文義を解しないこと。（字通）

六、四法（四つの教授法）とその逆の方法

H大學ノ法、未ダ發セザルニ禁ズルヲ之レ豫ト謂ヒ、其ノ可ニ當ルヲ之レ時ト謂ヒ、節ヲ陵エズシテ施スヲ之レ孫ト謂ヒ、相觀テ善クスルヲ之レ摩ト謂フ。此ノ四者ハ教ノ由リテ興ル所ナリ。

H.1【通釈】 大学における教育方法には次の四つがある。一に予。情欲・欲望の発生以前にこれを禁じていく予防の教育。二に時。教えを受けようと奮起して自発的にやつて来た時、タイムリーに行なう教育。三に孫。

学生によって年齢、学力など程度の差があるので、それに従つて行う教育。四に摩。お互いに切磋琢磨するグループ学習させる教育である（この場合、切磋琢磨するように教師が導く必要がある）。これら四法は教育の効果を大きくする優れた方法である。

I.1【通釈】 情欲が発して後に教育を行なつても、教がその情欲に勝つことが出来ない。一定の時期を過ぎて学問しても、非常に苦学するが効はない。順を追うことをせず、雑然と教育しても混乱して修得出来ない。独学で切磋琢磨する友がなければ、孤立偏見に陥り人から吸収することが少なく、視野が狭くなる。友と私事にわたるようなつまらない付き合いばかりすると、教師から離れていく。教師が例えをもつて事理を明らかにしようとするのを、素直に受け容れず狎れ侮るようなことであれば、学問は成らず捨てられてしまう。これらの六者は、教育を大きく阻害する原因である。

I.2【語釈・解説】 ○「扞格」は互いに拒みあうこと。抵抗があり進まない意。○「燕^レ辟廢^二其學」は、鄭注「師之譬喻ヲ^ナ廢ル」とあること。教師が例えをもつて事理を明らかにしようとするのを狎れ侮るようであれば学問は成らない、の意。

七、師のあるべき姿（とるべき方法）

八、学生の四つの偏り

J 君子既ニ教ノ由リテ興ル所ヲ知リ、又教ノ由リテ廢スル所ヲ知ル。然シテ後ニ以テ人ノ師^{タタク}為ルベキナリ。故ニ、君子ノ教喻スルヤ、道キテ牽カズ、強メシメテ抑サズ、開キテ達セズ。道キテ牽カザレバ、則チ和ス。強メシメテ抑サザレバ則チ易ラグ。開キテ達セザレバ、則チ思フ。和易ニシテ以テ思ハシムルハ善ク喻^{サト}スト謂フベシ。

J.1 【通釈】教の興るところと駄目になるところが分かつたならば初めて教師と言えるのである。だから、才徳のある教師は、指導はするが牽引しない。（手をさしのべて導くが、無理してぐいぐい引っ張るようなことはしない。）奨励はするが抑圧しない。（無理に押し上げるようなことはしない。）道を開けて方向を与えてやるが、最後の行きつくところまで世話をすることはない。（糸口を与えてやるが解答は与えず、自分で答えを求めさせる。）指導しても牽引しなければ抵抗しないので和やかに学習できる。奨励しても抑圧しなければ、心が平安であるから気易くついていく。方向を与えても解答までを与えないければ自発的に考えて到達点まで行きたいと思う。このように和易にして思わせる（穏やかで易らぐようにして、自ら考えるように導く）と、よく諭して良い教育が出来るのである。

K.1 【通釈】学生には四つの偏りがあるから、教師はこれを心得ておくべきである。先ず第一が「多キニ失ス」で、これは才能がないにも関わらず、やたらむさぼるタイプ。（楽観的・活動的だが、気が移りやすい氣質。）第二が「寡キニ失ス」。これは才能があるにも関わらず、非常に消極的なタイプ。（感情が冷たく、不活発な氣質。）第三が「易キニ失ス」。これは「なんだこんなに簡単か」と思つて了うタイプ。（情動的反應が速くて強いのを特色とする氣質。）第四が「止ルニ失ス」。これは発憤することがないタイプ。（自分で自分の知識の範囲を限定してしまうのである。）このような四失があるので、人間の心理が皆同じではないからである。教育する者は、各自の心情・性質を察知して、それらの偏りを救つてやることが必要である。そもそも教育と言うものは、その人の長所を引き伸ばしてやり、短所を抑制して無くすように指導するものなのである。

K.2 【語釈・解説】○教育は「長所を伸ばし短所を抑制する」ことだとう。一方、英語の *educate* はラテン語「引き出す」の意からだと言われるが、そこには抑制する・我慢させるというような意味はなさそうである。

L善ク歌フ者ハ人ヲシテ其ノ聲ヲ繼ガシメ、善ク教フル者ハ人ヲシテ其ノ志ヲ繼ガシム。〈言_ミ爲レ之善者。則後人樂_ミ放尙_一。〉其ノ言フヤ約ニシテ達、微ニシテ臧。譬_ス空_{ナカ}シテ喻スハ志ヲ繼グト謂フベシ。

L.1 【通釈】上手な歌い手が現わると、必ずその声を継いで歌つていこうとする者が現われる。優れた良い教育者であれば、必ずその志を受け継ぎ、立派な人材を育てる者が現われる。それらの人の言葉数は少ないが、要点をおさえて中心を外さないでいる。微言（奥深くすぐれた言葉）で、しかも臧（＝善）をよく明らかにしていく。比喩が少なく直接明瞭に説くので充分に教育出来て、その志を継いでいく者が現われる。

L.2 【語釈・解説】○鄭注「言_ミ爲レ之善者：樂_ミ放尙_一」の放・尙はならう・まねる意。鄭玄は、優れた師の指導を受けると、弟子は師の歌い方・教え方までをまねて楽しむ、というのである。○臧。臧否は善悪の意。

度に深浅のあることを知る。知つて後に指導の善し悪しが分かり、多くの人を正しく導くことができる。そのように多くの人を指導し得て後に眞の教師たり得る。そうして後に初めて人の長（達官の長）となり得る。人の長となり得て後に初めて、君主となることが出来る。従つて、教師となるべく学問する者は、君主となるべく学問するに等しいのである。だから、師を求め選ぶには慎重でなければならない。（立派な師について初めて、立派な君主となるべく指導が受けられる。）記（古書）に「三王四代は、（政治的な意味での明君というより）良師（倫理的な聖王）である」とあるのは、以上の意味を言うのだろう。

M.2 【語釈・解説】○鄭注の「美惡」は善惡の意。ここでいう長とは君主によって直接任命される官吏の長、即ち達官の長だという。○三王四代は、禹（夏朝を建てたとされる伝説上の王）・湯（殷朝初代の王）・文武（周の文王と武王）ということになろう。湯王は夏の桀王を、武王は殷の紂王という暴君を討ち新王朝を建てた。

N.1 凡ソ學ノ道、師ヲ嚴ニスルヲ難シト爲ス。〈嚴尊敬也〉師嚴ニシテ然シテ後ニ道尊シ。道尊クシテ然シテ後ニ民學ヲ敬スルヲ知ル。是ノ故ニ、君ノ其ノ臣ヲ臣トセザル所ノ者ハニアリ。其ノ戶_レ爲ルニ當リテハ、

則チ臣トセザルナリ。其ノ師爲ルニ當リテハ、則チ臣トセザルナリ。
（戸主也。爲_ニ祭主_一也。）大學ノ禮、天子ニ詔_ツグト雖モ北面スルコト無シ。師ヲ尊ブ所以ナリ。

N.2 【通釈】そもそも学問するには、先ず自分の師を尊敬することが最も大切である。師の尊厳性が保たれて初めて学問の道が尊ばれるのである。だからこそ、人々は、学問の尊重すべきことを知るのである。従つて、

君主と雖も、臣下をして扱わない場合が二つある。一つは、臣が祖

M.1 【通釈】君子は学問していくのには難易があり、各個人によつて理解

先祭祀の戸（形代）を勤める場合であり、二つ目は、臣が君主の教師となる場合とである。これらの時には臣下を臣として扱わない。大学の礼において、教師が天子に物事を告げる（お教え申し上げる）場合でも、北面することがない。これは、教師を尊ぶ所以である。

N.2 【語釈・解説】○戸。形代。祖先などを祭る時、その靈の代わりとなる者（大漢語林）。祭祀のとき、形代となることを戸主という。「戸は神像なり」（礼記、郊特性）とある（字通）。

十、実際教育上の技術

O.1 【通釈】熱心に学ぶ者であると、教師は苦労せず、効果は倍増する。そして、それを教師の手柄（庸）とする。逆に、よく学ばない者は、教師はよく努力するが、効果は半減する。そして、それを教師の指導不足だと恨む。質問の上手な者（学者、研究者）は、堅木を材に仕上げるよううなものだ。彫り易い（易しい）所を先にし、節など固い（難しい）所は後にする。時間を掛けてやつていたら自然に解きほぐれて分かるよう

○善ク學ブ者ハ、師逸シテ功倍ス。又從ヒテ之ヲ庸トス。善ク學バザル者ハ、師勤メテ功半ナリ。又從ヒテ之ヲ怨ム。善ク問フ者ハ、堅木ヲ攻ムルガ如シ。其ノ易キ者ヲ先ニシ、其ノ節目ヲ後ニス。其ノ久シキ二及ビテヤ、相説キテ以テ解ス。善ク問ハザル者ハ、此ニ反ス。善ク問ヲ待ツ者ハ、鐘ヲ撞クガ如シ。之ヲ叩クニ小ナル者ヲ以テセバ則チ小シク鳴り、之ヲ叩クニ大ナル者ヲ以テセバ則チ大ニ鳴ル。其ノ從容ヲ待チテ然シテ後ニ其ノ聲ヲ蓋ス。善ク問ニ答ヘザル者ハ、此ニ反ス。此レ皆學ニ進ムノ道ナリ。

P.1 【通釈】記問の学だけでは人の教師となるに足りない。教師たる者は学生（弟子）の言う處をよく聴き、適切に教示しなければならない。もし学生の学力不足で、質問の言葉に苦しむ様であるならば、教師の方から話して聽かせてやる。しかし、話しても理解しないのであれば、そこで止めても良い。

P.2 【語釈・解説】○記問ノ學。鄭注は「教師が予め質問を察し、雜難雜説の解答を記憶して来て授業中に学生方に論じさせるやり方で、教師は

になる。質問の下手な者は、これに反する方法をとるから、うまくいかない。よく問を待つ者（回答の上手な教師）は、鐘を撞く時のように脱、緩む」と言い、「字通」は「悦・脱と声義の通ずるところがある」と言う。難解などころも、時間を経れば自ずから解けることもあるのである。

心解出来ていかない場合もあり、学生は何を問えば良いのかが分からぬ。」
という。『大漢語林』は「書物や人の説などをただ暗記しているだけの
学問。また、そのやり方。」と言い、『新訛漢文大系』は「記問は記聞の
誤りで、読書や見聞を多くし、その記憶暗誦に努める学問・博覧強記の
学問と解する方が妥当」という。

Q 良治ノ子ハ、必ズ裘ヲ爲ルヲ學ビ、
《仍レ見其家綱ニ補穿鑿之器》也。

補レ器者。其金柔乃合。有レ似於爲レ裘。良弓ノ子ハ必ズ箕ヲ爲ル
ヲ學ブ。《仍レ見其家撓ニ角幹也。撓ニ角幹者、其材宜レ調。調乃
三體相勝。有レ似於爲ニ楊柳之箕。》始メテ馬ヲ駕スル者ハ、之ヲ
反シテ車馬ノ前ニ在リ。君子此ニ三者ヲ察セバ、以テ學ニ志有ルベシ。

Q.1 【通釈】 優れた鍛冶屋の子は、必ず皮衣を縫うことを覚え、優れた弓
師の子は、必ず箕を作ることを覚える。また、初めて馬に車を引かせる
時は親馬に引かせ、子馬は車の後から行かせて、車に慣れさせるのであ
る。君子は、この三例の意味（何事にも練習を積むことが肝要）を明ら
かに知るならば、学問教育に志と熱意を持つことが出来るだろう。

Q.2 【語釈・解説】 ○良治ノ子ハ、良弓ノ子ハ。鄭注では、鍛冶屋では
金属を溶かして器具を作つたり、金属器の漏りを防ぐのに鋲掛けて修理
するが、その家の子弟は直ちに金属を扱わず、先ず皮衣を用いて練習す
る、という主旨の説明をする。又、良い弓師の子弟も直ちに弓作りに携
わらず、必ず箕を作るなどやり易いところから入っていく、という。弩
弓のようなものなら、かなり熟練しなければ出来ないのであろう。

十一、まとめ

R.1 【通釈】 昔の学者は、物事を比較検討するのに同類を以つてした。例
えば、鼓は五声（五音階）の主とするところではないが、鼓の音が無け
れば樂音の調和がとれない。水は五色には入らないが、無色である水が
無ければ、五色の彩りが明らかにならない。学問は（朝廷の）五官職に
当らないが、学問が無ければ政治を行なうことが出来ない。教師は、五
服には入らないが、教師の教えが無ければ五服の親和を生ずることが出
来ない。

R.2 【語釈・解説】 ○比物醜類。「醜」は「讐と声義の通ずるところがあ
る」（字通）といわれ、讐（讐）には「なかも・同類・ともがら」の意
がある（大漢語林）。そうすると、醜類は讐（讐）類であり、同類の意、
と解せる。従つて、底本鼈頭に「比物醜類ハ同類（醜類）ノ事ヲ以テ相
比方シ以テ其理ヲ明ニス」と説くのが良かろう。「醜類」が悪党・わる
ものを意味する漢語でもあるから、従来、この所の意味が分かりにく
かつたのだと思われる。○五官。周の天子の五官（司徒・司馬・司空・
司士・司寇）。民政・軍事・土地人民・一般官僚等をつかさどる。○五
服—喪に服する五つの規定（斬衰・齊衰・大功・小功・総麻）。

S 君子曰ク。大德ハ官セズ。大道ハ器ナラズ。大信ハ約セズ。大時ハ齊
シカラズ。此ノ四者ヲ察セバ、以テ本ニ志有ルベシ。三王ノ川ヲ祭ル
（ひと）

ヤ、皆河ヲ先ニシテ海ヲ後ニス。或ハ源ナリ。或ハ委ナリ。此ヲ之レ本ヲ務ムト謂フ。

S.1 【通釈】君子が言うには、大人物は特別の才能があるわけではなく、一職の任に拘らない。大学者は特別の知識や技術があるわけではなく、一つの仕事に役立つものではない。信義の厚い人は誓約を立てない。大時（天時）は、昼夜、寒暑風雨、四時があり一樣ではない。この四例の意味を明らかに出来たならば、君子は物事の末端や見かけに惑わされず、學問の根本をしつかり立てなければならぬと考えるであろう。夏・殷・周三代の王は、水を祭るのに河川を先にし、海を後にした。それは、一方が根源であり、他方は末の集まりだからである。これこそ根本を重んずると言うことなのである。

おわりに

既に言られて久しいことだが、今日、三つの教育力が低下している。

①学校、②地域社会、③家庭、の教育力である。①は学校教員や教育行政が抱える諸問題。学校を出て教師になり、知識を伝えることはできる。しかし、人間関係が成立していなければ教育はうまくゆかず思い悩む。誰もが通る道だが、多くの教師が経験主義的であつたならば、教育方法の発展はなかなか望めない。②では都会を中心として急速に進むマンショニ化に伴う地縁集団の崩壊がある。コンクリートの壁と鉄の扉で閉ざされた部屋で暮らす人々は文字通りの「個人」となり、隣人とのつながりが薄れ孤立化しつつある。③ではそのことが子育て中の親にも影響し、延いては子どもの教育や成長に好ましくない結果をもたらすこともある。

①～③に於いて、ちょっとしたアドバイスや言葉掛けをしたいのだが、何をどのように、タイミングよく伝えたら良いのかが分からぬ。このように感じる人が増えてきたのではないかろうか。急速に変化する世の中にあって、世の流れに取り残されまい、乗り遅れまいとするあまりに、長い年月をかけて先人が残し伝えてくれた知恵の恩恵に預かる事をしなくなっている。その知恵の集積の存在すらも知らずに過ぎてゆくこともある。ここに紹介した「学記」もその一つである。いまだ熟さない通釈だが、これを繰り返し読み、自らの手で書き写し、できれば自らの通釈を作成されたなら、新たな気付きに遭遇されることがあるのでなかろうか。そのような活用の仕方をして下さり、自らの教育方法を編み出されたなら、本稿執筆の意味も多少はあるかもしれません。

(注1)『研究資料漢文学 第一巻 思想II』(明治書院 平成五年〈一九九〇年〉)。

(注2)『大漢語林』

(注3)筆者は「十四歳で『学記』と出会い、折に触れてこれを読み返して教室に立つ自らの指導を反省する物差しとした。又、幼児から中学・高校生に至る子育て真っ最中の母親等と共に何回か輪読会を開いた。現在の勤務校に移つて後は、同僚教員等に紹介を兼ねて『学記』の読書会を行つたことも数回ある。参加した同僚教員の専攻は人文・社会・自然の三科学分野に渡るが、中には中学校や高等学校の永年勤続体験者(公立中学・高校長)もいた。これらの経験で得た参加者等の感想には「もっと早くに知つておきたかった」とか「このようないい便利で有益な書物が二千年以上も前に体系化されていたことに驚いた」等が多かった。就中、長く京都教育大学教授を務め、その大学院設立に奔走尽力された山崎隆博士(化学専攻)は「文部省(当時)のお役人にも読んでもらいたい」という思想をしみじみと洩らさせていた。

(注4)筆者自らの指導者体験としては、中学校・高等学校国語科教諭を計十年間、短期大学・大学・大学院等で計三十五年間、地域社会における小学生の指導を計三十年間行つた。

[参考文献]

- ・ 『重刊宋本禮記注疏』
- ・ 『漢文大系 禮記』(富山房 大正二年〈1913〉)。
- ・ 『漢籍国字解全書 禮記』(早稲田大学出版部 大正二年〈1914〉)。
- ・ 『國譯漢文大成禮記』(国民文庫刊行会 大正十年〈1921〉)。
- ・ 『漢文叢書 禮記』(有朋堂 昭和二年〈1927〉)。
- ・ 『中国古典新書 礼記』(明徳出版社 昭和四十八年〈1973〉)。
- ・ 『新釈漢文大系 礼記』(明治書院 昭和五十二年〈1977〉)。
- ・ 『全釈漢文大系 礼記』(集英社 昭和五十二年〈1977〉)。
- ・ 『大漢語林』(大修館書店)。
- ・ 『字通』(平凡社)。
- ・ 『大字源』(角川書店)。